

das Reale & das Ideale

(シェリングの同一哲學を中心にして)

西 谷 啓 治

これはシェリングと共にベルグソンを取扱つた卒業論文の一部で、こゝにはシェリングに關する部分から主な所を抜いて載せることにした。篇中ベルグソンの名が比較的多く出るのはそのためである。

—

シェリングの絶對的觀念論の主題は、有限なるものと無限なるものとを永遠なるものゝうちに於て見んとすること、*das Reale* と *das Ideale* とを *das Absolute* に於て結合に入らしめんとすることである。單に有限無限なるものはない。所謂有限も無限も共に永遠なるイデーを含み、これを通じて直ちに永遠のうちにあるといふのである。シェリングはスピノザを除いてデカルトに初まりフイヒテに至る近世哲學

の特徴を二元論にあると考へた。デカルトがその *cogito ergo sum* より來る、*real* と *ideal* との對立を以つてイデーを分裂せしめて以來、無限なるものもその眞の意義を失つて、單に主觀的となつた。この主觀化の方向を徹底せしめて絶對的なるもの、*Realität* を全く否定したものが批判哲學であるが、同時にこれによつて哲學の復興の第一歩は初まつたのである。(シェリングの意味は恐らく一面の方向が徹底する所、必ず他の一面への結合が現はれると考へるを得べく、批判主義は主觀化の發展の自己反省、主觀化の主觀化として既に、客觀への結合の方向に轉じたものであるといふのであらう。)知識學の *Idealismus* はかゝる主觀化を完成したものである。絶對者は *das Ansich* として *ein absolut Objektives schlechthin ausser dem Ich* であるが、知識學には *das ausser dem Ich Setzen* は再び *Setzen für das Ich* として自我のうちにある故、眞の絶對者は到達すべからざる彼方にあつた。知識學はかゝる永遠にして止まざる反省の循環を表はす。其處に於ては絶對者は單に行爲のうちに於て認められるにすぎぬ。フイヒテに於て近世の哲學はその道を行き盡して、主觀が自己自身の意識に歸つたのである。(vgl. Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums. VI) 故にその哲學は一面に於て眞實在の根抵に達したのであるが、然もそれがためには總ての *real* な

るものを抽象し去らねばならなかつた。故にそれは單に主觀的作用の一面に發展するのみであつて、何等の具體的知識に關係し行くことは出來ぬ。單に知識のみの知識たるを出で得ぬ。かくしてシェリングは無限なるものゝ眞の意味を回復して、これを主觀性の一面より解放せねばならぬと考へた。而して同時に超越的にして純客觀的なるイデーの世界がこれと共に現れて來たのである。

シェリングはかゝる考へに至る以前、未だ全くフイヒテの手を離れざる超越的觀念論の時代に於て、總て知識は主觀と客觀との一致の上に成り立つものであり、然も知るといふその時、即ち自分が知る間は (*im Wissen selbst - in dem ich weis*) 未分なる主客のいづれに *Priorität* を與へ得るかを問ふことは出來ぬ。唯この同一に説明を加へんとすれば既にこの立場を去つて、主觀より客觀に、客觀より主觀に至る二つの方向のいづれかを取らねばならぬ、かくして超越的觀念論としての哲學と自然哲學との二つの根本的學問を生ずると考へたのであるが、かく一方に超越哲學と他方に *Platon* なるものゝ獨立なる學問とを對立せしめたのは、既にその所謂主觀化的方向を轉せんとして模索した時期であつたと考へ得る。而してかゝるデカルトに平行せる二元論より自己の立場を自覺して、この兩者を統一したとき再び新らしきスピノザ主義

に這入つて行つたのである。

絶對者の立場は主觀と客觀との具體的統一たるイデーの世界である。有限と無限特殊と一般形式と本質等の對立も其處に於て止揚される。凡そ絶對的立場はあらゆる對立の統一でなければならぬ。對立と之に對立する統一との對立の最高の統一は無限なる統一を要求する絶對的對立の克服である。シェリングはまたこれを純なる Differenz の超越によつて純なる Indifferenz に至るといふ如く言ひ表はしてゐる。すべての最高ならざる統一 (höhere Einheiten) はこれに反して、内に Differenz との相互限定を含む限り尙濁れる統一であつて、自己の純化に向つて無限なる努力を續ける自覺的發展をなすべきものである。扱知識の世界に於ける根本的對立は思惟と直觀とのそれである。各の直觀は個々の場合に於て全く限定されたものである。一の直觀は他の直觀によつて限定され、かくして無限に進まねばならぬ。こゝは直觀が Differenz の方向を本質とする立場なることを示す。之に反して概念は Indifferenz の 方向を本質とする立場に生ずる。單なる一般である。すべての從屬的立場に於てこの相反する二つの方向を統一するものがイデーである。純なる Differenz の影を追ひ盡して純なる Indifferenz の統一を保つものは最高のイデーである故、最高

のイデーはイデーのイデーである。

故にかゝる絶對者は一にして一切である。有限なる物も無限なる概念もその影を宿し、永遠を含む。即ち即自にその本質より見れば、此等は皆絶對者のうちに於てその一面を表はすものであつて、本來有限者、無限者なるものが各、獨立してあるのではない。然るに *real* と *ideal* とのこの對立が生ずるのは無限なる概念の立場、即ち後に云ふ如く反省的自我の立場より見る故である。同一の本質の異なる形式の對立である。即ち *ideal* なる對立である。 *real* が *ideal* の限定を以て存立するといふのではない。兩者共に絶對者の模像である。然らずして、兩者の對立が *reale* なる立場に發生するものであつて、即自には形式と本質と全く一なる絶對者あるのみと云ふにすぎない。この説が絶對的觀念論と呼ばれるのもこの理由によつてである。

——吾々は進んで尙少しく具體的内容の叙述に入らねばならぬ。

シエリングによれば所謂自然界も認識界と共に絶對者の *real* と *ideal* の兩面をなすものである。兩者を全く分裂したるものとして、對自的に *das Ideale* より切り離されたる *das Reale* を考へるのは自然の單に經驗的見方にすぎぬ。自然も絶對的には全く對立を絶せる渾然たる宇宙である。イデーの胎である。抑、イデーの起源は

自己を客觀化せんとする絶對者の永遠なる法則に存する。此主客觀化によつて神の本質が一般者として、特殊なる形式に *einbilden* されイデーを生産するのである。かゝるイデーも更に神の性質を享けて生産的である、自己の本質を特殊化して個々の物の靈となる。故に物に於てその肉はその靈と、神に於ける有限、無限の兩面を表現する。物はイデーを含んで、之を通して永遠である。物も神の模像である。シエリングはこれを自然の哲學的見方と稱した。(Bruno, Werke, Hrsg. v. Weiss II S. 461—4; Vol. XI)

直觀は即自には無限なる他の直觀との、更には思惟との關係を含むものであつて、此等との關係を離れて獨自に存するものではない。然るは唯反省的自我の單なる思惟界に於て、直觀が思惟との對立に於てのみ考へられる故である。この分裂によつて即自には *das Erste* なるイデーも時間のうちに移され、*das Dritte* として現象して所謂自然界の出現を齎すのである。故に物のうちにも幽閉されたる無限、永遠がある。その三つの次元は物の靈としてそのうちにある無限者に有限、無限、永遠の絶對的關係が投射されたものであり、物の自己同一性はその含めるイデーによるのである。物に於ける無機物、有機體、理性的存在の區別も絶對者に於ける圖式が物のうち

に更に高き立場に於て顯はれたものにすぎない。併しかゝる物の内に入りたる靈有限となれる概念は、無限なる概念、概念そのものと對立せるものである。即ち思惟自身の圈内に於ても *das Reelle* と *das Ideelle* との分裂が考へられるのであるがこの分裂こそ有限なる物の世界のあらゆる對立の根柢となる根本的分裂である。(alle Gegensätze, wodurch endliche Dinge bestimmt und unterschieden sind, durch jene Eine Trennung gesetzt seien, welche selbst nur innerhalb des Ewigen und nicht in Ansehung des Absoluten, sondern nur in Ansehung des von ihm für sich Abgesonderten, gemacht ist. op. cit. s. 489)

かく直觀と思惟との分裂を起す Differenz が思惟の世界に於けるそれに根元を有するといふことは、もし直觀と思惟との對立が方向を轉じて個別的なる有限的認識(即ち物に即せる意味の直觀に非ずして、作用としての直觀)と無限的認識(即ち純粹思惟)との間の關係に還元せられて、無限者が自己自らに歸れる世界を自我とすれば、有限界に於ける物と物との分離がかゝる自我に於ける分裂に根差し、自我を通じて又自我に對してのみ現象的となることを意味する。——かゝる認識の無限界に於ても、その内に三つの面が含まれる。有限なる認識は「無限、有限、永遠者」としての無限界の全體がその有限なる一面に自己を表はしたものである。純粹なる思惟に於てはこ

の *Drei-Einigkeit* は無限者に從屬する。こゝに於ては總てが無限であるが尙悟性的無限にすぎぬ。この無限界の無限者たる純粹思惟のうち無限者が無限に定立せられたものが概念であり、有限が無限者に取り入れられて判斷生じ、永遠が無限者に含まれて推論となる。

概念は純粹の無限者に於て更にその核をなすものである。即ち單に絶對者がその無限なる一面に自己を顯はせる「無限、有限、永遠者」の無限なるのみならずこの無限の無限である。即ち「無限、有限、永遠者」に從屬する「無限、有限、永遠者」の無限である。かゝる概念に於て、無限者、有限者、永遠者が自己を重ね、自己によつて貫かれて (*in sich selbst vervielfacht und von sich selbst durchdrungen*) 範疇の數を定めるのである。即ち無限の無限の無限たる概念が更にその無限、有限、永遠の面に自己を顯はし、一多、總體と、限界なき實在絶對的非實在、及その結合と、本質と屬性、原因と結果、相互限定との九つの範疇を産む。而してこの三對の範疇は概念の世界に於ける可能現實必然を表はすものであり、各の群の三者は夫々またその内に於ける無限有限、永遠或は可能現實必然を表はす。同時に此等次位を異にする立場の無限有限永遠の三者すべては、各の立場に於て第三者が前二者の統一であつて *das Dritte* として反省さるゝも實は *das*

Ersteであるといふ關係に立つ。故に例へば關係範疇は他の二つの範疇の統一であり、従つて無限と有限の結合として、その二對の概念の前者は無限を、後者は有限を表はす。のみならず概念の無限性は悟性の無限即ち反省の無限であり、反省の圖式は時間なる故範疇は物の構成に入るに際して、これに時間を植える。併し質範疇はその中にあつて、空間性を代表するものであつて、その即而對自の範疇、即ち限界なきものと限界そのものとの結合は *das Erste* として直觀界に絶對空間となるものである。而して此等すべての三者は更に高き三者、即ち概念、判斷、推論に對應するものであり、更に絶對的に見れば絶對的統一、絶對的對立、統一と對立との絶對的統一の影像である。

判斷に關してはシェリングは判斷に於ける反省的理性の機制は概念に於けるそれをその儘判斷に持ち來せば足りる故、更めて考察する必要なしといつて直ちに推論に進んでゐる。併し實際は後にも觸るゝ如くこの判斷界に最も重大な問題殊にシェリングの絶對的觀念論の破綻を露はす如き種々の問題が潜んで居るのではないかと思はれる。

推論に於て純粹思惟の無限者に永遠が定立される。而してこは同時に認識の無

限界に永遠が定立されることであらう。何となればこの永遠は即ち無限界の永遠者であり、これはまた直ちに永遠者そのものである故である。こゝに永遠が層をなす總ての立場を貫いて一線に重なる故である。總て高き或は低き立場の永遠が同時に一の永遠として自己を重ねるのである。吾々はかく考へて、即自に見れば一切は絶對的であるといふシェリングの意味を解することを得るであらう。——各の推論には即自に既に可能、現實、必然が結合され、唯これが更に無限、有限、永遠の形式の下に顯はるゝ差によつて、定言的、假言的、選言的の區別が生ずるのである。然もその各、に於て大前提は小前提に關して恒に定言的であり、小前提は假言的、結論は兩者の結合として選言的である。

かくして吾々は有限無限の素を含める一つ永遠者が物の形體より推論の形式のうちに至るまで自己を顯はすのを檢して來た。即ち所謂現象界といふ如きものも内に無限、永遠を含み、即自に見ればこれを通じて絶對者のうちにあるといふことが出来る。單なる知識も現象にすぎない。有限なる客觀的認識と無限なる認識即純粹思惟との關係より生ずる如き概念は範疇として物を一般的に必然的に限定するものとして物以前であるが、然もこれは物が恰も物自體の考の如く概念との關係に

入らぬ前にこれより獨立して實在することを意味するのではない。物は二つの認識の結合即ち知識を離れては無である。故に全現象界は對自に見られたる知識のうちに出現するものであるが、然もこの知識自身も單に現象せるものにすぎぬ。此處には反省的自我即悟性が支配するのみである故である。推論と雖もさうである。もしかくの如く論理の法則が思辨的根據よりして、單に反省的認識に對してのみ必然的なるものと解せらるゝならば、論理は既に絶對的理性の學ではなく、その一般的體系の一の特殊なる Potenz (部分のうちにも全體を見るシエリングはかゝる言葉を用ひた) にすぎぬ。然るにカントの純粹理性の批判は論理の絶對性を豫想して成立する以上、それは理性を悟性に從屬せしめたるものと云はざるを得ぬ。かゝる從屬的理性が推論の能力である。もし推論による以外に絶對者を認識する方法なく、理性も悟性の形に於てのみ用ひ得るとすれば、カントが無制約者の直接なる認識を斷念したのも當然であらう。併し推論の大前提は思惟に、小前提は直觀に對應して、概念に於ける Indifferenz を判斷に於ける Differenz とを結合せるものであるが、結論に於ける一般と特殊、悟性と感性との統一も、この二者の分裂が既に悟性の世界に於けるものである以上、矢張悟性に對するものたることを出でぬ。かゝる對立は理性に於て

絶對的結合に入る。然もかゝる理性と悟性に從屬せる理性とを混同するは大なる誤謬である。論理に哲學を求むるのは不充分である。(op. cit. s. 502—4. Vorl. VI.) またフイヒテの如く有限なるものゝ存立は單に *ideell* なる限定といふのみでも足りぬ。das *Ideelle* は無限にすぎぬ。眞實には永遠者の外には何物もなく、單に有限なるものは *reell* には勿論 *ideell* にもないのである。故に有限なるものゝみに關して *Idealismus* なる哲學も不備なるを免れぬ。

總て主觀化の方向を脱せぬ限り、單なる無限の悟性の埒外に出づることが出來ぬ。併し悟性的知識は可能なるものが即ち現實的である絶對的知識の模像として、單にその相對的統一にすぎぬ。従つて現象界に於ては可能が現實に先立つ *ideal* なる世界と、現實が可能に先立つ *real* なる世界とに分れる。*real* なる有限界に投射されたる絶對者は總ての働きの否定なる純なる存在として空間である。空間は、有限界に *Drei-Einigkeit* を映じたるもの故、單に具體的なる物でもなく、又抽象的概念でもない。絶對的に *real* なると同時に絶對的に *ideal* にし、幾何學の根抵となる。*Drei-Einigkeit* が das *Ideale* に映されたるときは、すべての存在を否定せる純なる働き、即ち純なる時間である。かゝる時間に於ては存在はなく唯活動として存在の變化あるのみであ

る。經驗的時間に於ては可能と現實は因果の關係のうちに前となり後となるが、純粹時間（Vol. IV）に於ては兩者は一である。

併しかゝる現象界の發生は無限界に於ける有限無限の分裂に初まる。本質の方面より見れば總て絕對者のうちにある。唯形式を本質より離して見る立場に假象が生ずるのである。物は唯自我に對してのみ現象する。 *das Reelle* と *das Ideelle* との對立も *ideell* である。この絕對哲學は絕對的觀念論である。

—

このシェリングの絕對的立場はフイヒテの如き立場より當然出で來るべき者と思はれる。フイヒテに於てはシェリングもいふ如く絕對的統一はすべて要求たるに止まり、吾々はすべての方向に於て當爲の闕を越えることが出來ぬ。限界を越えて進まんとする自我の働きは恒にまた自己の内に驅られる。客觀的働きは現實に於てこれに平衡を與へる如き限定を有し得ず、恒に限定に對する傾向であり努力であるに止まる。限定は反省されて有限となり、限界は再び擴張されるがこれも再び反省され、かくして無限なる努力あるのみである。かゝる立場では純非合理的なる

經驗内容そのものに充分なる *Rechtfertigung* を與へることは出來ぬ、非合理的なるものを直接に合理化し得ぬのではないであらうか。シェリングが單に主觀的一面に徹底するものといふのもこの故である。ヘーゲルがカントと共にフイヒテを *Psychologischer Idealismus* と評し去つたのも一先づは妥當であると思ふ。之に反して絶對的立場に立つことによつて有限に無限より獨立なる絶對性を與へて *Nicht-ich* たることより解放し、絶對者に於ける有限と無限との絶對的統一を考へるとともに現象としての有限の世界も無限より離れて獨立せる世界として、永遠者の影を宿しこれを通じて永遠者に參しかくして内容ある知識をも許し得るに至る。のみならずすべての學問もかゝる立場に於て互ひに内面的に關係を附けることが出来る。シェリングの「講演」はその具體的なる試みであつて「根本知 *Urwissen* がすべての學問の發し、また歸りゆく處であり、それが具體者に *einbliden* することによつて同一の中心點より認識の全體がその末梢に至るまで形成される」のである。勿論シェリングに於ては思辨の立場以外のすべての特殊的立場の除却を意味したのであるが、それは排斥するとしてもアブリオリの間^{の間}に於ける關係を明にするにはシェリングの如き立場を豫想せねばならぬと思はれる。シェリングは多くの哲學に於ては問題にさ

れず、或は理論の基礎附けを拒まれ、或は消極的に合理化さるべき課題としてのみ考へられる非合理的なるものを正面より體系の連鎖のうちに繋ぐことによつて、極めて整然たる秩序と透明なる結構とを有して、眞に宇宙の虧くる處なき圓滿性の象徴たる感を抱かしむる *Drei-Einigkeit* の思想を作り得た。勿論シェリングは單に個物の自己同一性は絶對者の影であるといふのみであるが、兎に角最高の立場に立つことによつて最低のものにも積極的基礎を與へることが出来たと考へられる。有限もうちに無限、永遠の影を宿し、無限も、その有限を包んで永遠を含み、然も有限無限共に永遠のうちに抱かれて萬物は完全なる調和の中にあるのである。併し同時にシェリングの思想に對する吾々の疑問も不満も正にこの搖ぎなき調和に對して起るのである。

シェリングは純粹なる思辨によつて一者を得た。哲學する事に於ける神の直觀は直に神の自己直觀である、絶對者に於て眞に主觀と客觀との同一がある。人の立場に於ける主客の合一のみならず、神の立場に於ても主客合一である。更に人の立場に於ける主觀が神の立場の客觀となるにも拘らず、人の立場と神の立場とは同一である。人に眞の意味に於て客觀なるは神のみである（ライブニッツもかく考へ

た。現象界は人に對してのみ存立する者である故現象界なのであつて、之は無に等しい。神の人化、人の神化といふシェリングの絶對者はスピீザの本質の如き者である。然らば有限、無限のうちにかゝる絶對者を見るといひ、或は永遠の相の下に見るとは如何なる事か。カッシーラーはシェリングはその所謂、想像の國美的主觀の世界に於てのみ彼自身であるといつてゐるが、(Freiheit u. Form S. 551) 私もシェリングの精神活動の基調をなすものは藝術的直觀であり、その哲學もかゝる種の直觀の上に建つてゐると考へる。即ち有限のうちに永遠を見るといふ如きことも、藝術家が物に於て永遠の美を見るといふのと本質に於て相類するものであると思はれる。シェリングに於ては絶對者は美と眞との合一として到達された。更に最高のイデーに於ける思惟と直觀、一と多との不可分離的結合こそ美と眞との性質であると繰返されてゐる。故に哲學者はその哲學的見方により有限なる物を通じて永遠なる眞を直觀することにより絶對者に至り、藝術家は物に於て永遠なる美を直觀することによつて絶對者に觸るゝのであらう。シェリングも超越的觀念論に於て既に藝術を以て哲學の Organ とした。シェリングの哲學する自我は藝術家であつたといひ得る。

もし創造といふことを根本的なる意味に限るならば、藝術の世界に於ては創造なるものはないといはねばならぬ。眞の創造は道德的行爲に於けるが如く全體を一つの方向に集めて之を押し進めることである。藝術に於ても、道德に於ても働く自我の背後に大なる生命といふ如きものが考へられ得るが、道德的行爲に於てはこの生命が自覺的であるといふことが出来る。自我の背後なる大なる生命と自我の前者なる社會とは本來 *identisch* なるものである。社會は客觀的精神である。その中間に働く自我に於てこの兩者は一つの方向に合して全體が前に動く。これが眞の創造である。藝術に於ては大なる自我はいはゞ無自覺であつて自然と直ちに *identisch* であるとはいひ得ぬ。兩者の結合は偶然的なるを免れぬ。素材はこゝでもベルグソンのいふ如く二つのラケットの間を飛ぶ球の如く、生産するものと生産物との關係の偶然性の必然的補充である。藝術的直觀が美を創造するのは美を見出すのである。自然の土壤のうちに隠れたる美の寶石を掘り出すことである。勿論藝術家自身の立場よりは純なる創造であらうが、美も一面に於てその素材を離れることは出来ぬ。恐らく素材が自らある個性的發展をなして美を輝き出すのであつて、藝術家の働きはその過程にすぎぬとも考へて考へられぬことはない。こゝに道德的行

爲の相違があると思はれる。勿論藝術家の働きも單に無意識的ではないであらう。藝術家も藝術家として自己の働きの明白なる意識を有して居るであらうが、少く其その働きの概念的反省の圈を通つて屈折し來つたものではなく、直ちに大なる生命と結合し、その露はなる働きのうちに自己を没する點に於て、行爲のうちに行爲の反省を含まぬといふ意味に於て無意識的といひ得る。藝術家の働きはその無意識の背景のうちに二つの相反する方向に於て純なる發展と結合する。故に畫かれたものは一方に於て畫家自身も知らざる彼の深き自我の顯れであり、他方色そのもの、純なる發展である。この道徳的行爲との相違によつて藝術に於て創造の働きそのものが輕視されるのであらう。

藝術的直觀を藝術家自身の立場を去つて外より見れば唯描かれた畫とこの畫に存在を與へた大なる生命とを考へれば足りるであらう。勿論シエリングも從屬的イデーに含まるゝ概念を考へた如くに、この場合も個性ある藝術家の働きを消し去ることは出來ぬであらう。併しこの働きは個性を通じて大なる生命に屬するものとして、單に一種の媒介過程の如き意味となり、畫はその畫家のイデーを通じて大なる生命に於て絶對的となる。一切は絶對的である。かゝる見方よりすれば描きつ

へある畫家の働きは問題となくなるであらう。吾々は唯描かれた畫を有すればよい。併しかゝる見方を以て満足し終るべきであらうか。外より見る反省の結果を以て足るとするのは主知主義の常であるが、かくては吾々はその外に藝術家自身の純なる創造の意識を残すことゝなるであらう。勿論シェリングの思辨の如きは内外を合一し、反省を超越したる具體的立場であるともいへるであらう。併し生ける働きをその純なる姿に於て捕へることなしに、内を殺して爲されたる内外の合一は尙反省の痕を止めてゐると考へねばならぬであらう。大なる生命と描かれたる畫は緊張と弛緩との兩極である。この中間に吾々は無限の振動を見ることが出来る。個性といふ如きものはこのうちに働くものでなければならぬ。働きつゝある大なる生命を見、自らを描きつゝある畫を見んとするならばその中間に働く創造作用を抹し去ることは出来ぬ。一度描きつゝある畫家の立場に立つて其處より更に内に入り、外に出でねばならぬと思ふ。再びベルグソンの言葉を藉りれば爲されたる行爲の以前に、それを持續の動的状態に於て、爲されつゝある行爲に於て見ることを要する。かゝる働きが个性的であり、個性は大なる生命に接するものとすれば、この個性も生命も動的でなければならぬ。

ウインデルバントはシェリングがフイヒテの知識學に自然哲學を加へ、後に絶對的觀念論に至るに従ひ、自我は次第にフイヒテの純我或は絶對我より普通の個人的自我の意味に墮して行つたといふが、その當否は兎に角、自我の意味が甚だ異つた者となつて行き、また行かざるを得なかつたのは當然である。シェリングが「ブルノ」に説く處によれば、認識の世界に於ても有限なる認識と無限なる認識とを區別するを得るが、認識として綜合の立場に於て見れば、前者も無限である。かく無限者が自己に復歸せる事を表すものが自我である。(das zu sich selber Kommen des Unendlichen) の統一も自我自身の行爲であり、自我の生ずる行爲自身が自我である。唯永遠者は靈と肉との自我の眼には必然として映ずる。物の間の神的調和も必然と考へられるのである。かくてシェリングの自我は一の靜的統一となつた。勿論此處にもフイヒテの純我の外殼のその儘存するを見るが、その自我は有限なる物と永遠なる神との間に挾つて固定されたものである。フイヒテに於ては自我はすべての根元であり、すべての根抵に現在動いてゐるものであつた。シェリングの自我は下に物を固定し上に永遠者を頂いて中間に産れたものであつた。この點より見れば、吾々はそれを殆んど通常の個人的自我の立場とすら云ひ得る。この推移は一面論理的に

必然であつたではあらう。主知主義に於て嚴密に主客の對立を超越して最も具體的なる眞理の世界を考へんとすれば、すべての心理的契機を除いて超越的價値の如き純客觀的なる立場に至るべきであつて、フイヒテの純我の如きものも既に主觀的心理的であるとして排せられねばならぬかも知れぬ。シェリングはこの立場に進んだものと云ふことが出来るが、同時に純なる働きの世界は基礎を除かれて凝然たる塑像の上に戯るゝ影の如くに浮搖せねばならぬ。併し成長しつゝある自我、一瞬の過去にも歸り得ぬ自我、返らんとする努力そのものによつて殖え變容する自我はかゝる運命の下に置かるゝことを肯んせぬであらう。自覺は實に意識のかゝる持續的綜合である。シェリングの絶對的觀念論はフイヒテの事行に何等かの處を與へねばならぬと思はれる。

シェリングは要するに主知主義に立ち、主知主義の難點を離れ得ざるものである。主知主義は飽くまで Sein を Nicht-sein との統一としてのイデーの立場に立つ、併し Einheit を Einheit des Gegensatzes である。故に吾々は、この Einheit とその Einheit des Gegensatzes への Einheit を求めねばならぬ。即ち Einheit は自己のうちに自己表現を續けて行かねばならぬ。然らばこは如何にして可能であるか。或は統一は何故に對立

を含むか。もしこの兩者の統一を考へれば、更にこの統一と對立との統一は何故に統一と對立との對立を含むか。即ち吾々は一般的に抑、對立は何處より來るか、イデーは何故に現實に墮するかを問はねばならぬ。勿論主知主義はイデーの上にイデーを積みかくして最高のイデーに達するであらう。併し吾々は恒に、然らばシェリング自身が考へた如く、かゝる最高の統一は何故に最高の對立の統一でなければならぬかを問はねばならぬ。勿論最高の統一は *das Dritte* として現はるゝも實は *das Erste* であらうが、然らばこの事自身は何を意味するのであるか。主知主義はこゝに至つて窮せねばならぬと思ふ。價値の世界は如何にして實在の世界に關係し來るか。それがシェリングの場合の如く現象界の名の下に單なる假相として取扱はるゝも、然らばかゝる假相とは如何なるものか、眞實在と如何に關係するか。或は絶對的立場より見れば無であるかも知れぬ、併し無を無とせざる立場反省の立場そのものは如何にしても無とは云ひ難い。然らざれば現象界も絶對的には無であるといひ得ることすら不可解であらう。然らばこの反省の立場は如何なるものか。シェリングは現象は自我に對してのみ考へられるといふ。然らばこの事實は何故であるか。シェリングは後に意志自由の問題に入り、惡の起源を考へたのはこの缺陷に

氣附いたからであらう。併し兎に角こは主知主義に立つ限り答へられ得ぬ間であると思ふ。主知主義は唯何處までもより高き統一へ統一へと進まざるを得ないであらう。かくして超越されたものは恒に背後に棄却されてゆき、最高のイデーに至つて假象とせられるのである。勿論シェリングも一方に於ては有限も無限も時間以前に永遠に絶對者のうちに憩へる者と考へてゐる。併し自覺に於ける有限と無限の分裂、客觀的認識と無限なる認識の根本的分裂より時間の世界、空間の世界が現れるといふ考は避ける事が出来ぬ。のみならずシェリングは二元論の時代に於て存在の世界と知識の世界とを分つと同時に、自然科學も獨斷論の必然的歸結であり、この世界の最高原理たる物質の如きも根元的なる純客觀者にあらずして、超越哲學の最高原理即ち自覺に歸り來るべき者であると考へたと平行して、此處に於ても存在は單に *Rein* なる限定によつて獨立するにすぎず、この意味に於て無限者のうちの反省によつて生じたものとも考へ得ると同時に、他方絶對者より見れば有限も無限も等しく現象界として同じ闇に没してゐる。或は絶對者に於て有限も無限も共にその *real* なる一面と *ideal* なる一面として肩を並べて對立してゐるのである。此等は一見して明かなる矛盾である。而してヘーゲルの攻撃も専らこれ等の點に向つ

たのである。のみならず、シェリングの如き立場に於ては、反價値の問題、誤謬の可能、惡の起源等に對して答へ得ぬのは明かである。絶對者はそのものとして、誤謬を含み、惡を爲すものでないとするれば、この事實を説明するためには、現象界と絶對者との間に更に内面的なる關係を必要とするのである。シェリングもこの困難を自覺し、これに對して自己の立場を辯護して、誤謬や不完全と考へられるものは實は吾々の從屬的知識の世界に於て、いあつて、即自に見れば、すべて自然であり、眞である、自然そのものは全く偽りを含まぬといつてゐる。これは勿論さうであるが併しこれを以て、眞を偽と、完全を不完全と別つ對自的の立場を抹し去ることは出来ぬ。これによれば恰も不完全なるものが闇の中の牛の如くそのまゝ完全であると考へられ得るかの様であるが、然らば不完全と考へる見方そのものゝ不完全は何處より來るかを説明することは出来ぬ、或はこの見方をもそれはそれとして眞であり、偽なき自然の全體として見れば完全であるといひ得るかも知れぬ、現にシェリングもかく考へて逃れてゐるが併しかくすれば後にヤコビーが批難して、スピノザは自然主義を率直に標榜したが、シェリングの哲學は有神論の假面を被れる自然主義であるといつたのも、假令その言表に於て不充份であつて、シェリングの反駁に抗し得なかつたとは

いへ、全く不當ではないであらう。ヘーゲルは如何に一切が絶対者のうちにあり、その影像であるとしても單に吾々が擅に經驗より持ち來るものすべてをその儘絶対者のうちに置き換うるだけでは不充分であつて、直觀を思惟と同様に絶対者のうちに歸入せしむるのは現實に非現實の見方を與へる者である故、更にこれ等のものをその絶対者との内面的關係より見ねばならぬ、即ち單に現象界を絶対者のうちに没するのみではなく、絶対者を現象界のうちより輝き出さしめねばならぬ、單なる絶対的同一のみでは何事をもなし得ない、かゝる消極的一面に止まつてゐては眞の内容ある體系としての哲學は不可能である、絶対者には必ず影のごとくに現象界が付き纏ふ、もし Identität が妥當するものとすれば、之と並んで分裂 *Trennung* も妥當せねばならぬ、眞の絶対者は同一と非同一定の同一 Identität der Identität und der Nicht-Identität でなければならぬ、即ちイデーを動的に考へることによつて、所謂現象界の間にイデーの發展による内面的聯關を現出せしめ、同時に絶対者と現象界をイデーの自己復歸によつて繋がねばならぬと考へた。かくしてヘーゲルには假相としての現象界はなくなつてすべてがイデーの發展となつた。シェリングは *Nichts existiert, was nicht im Ewigen endlich und unendlich ausgedrückt wäre.* といふ以上に出づることが出來な

つた故、現實の内容的説明は上よりすべてを徹ふ絶對者によつて皆非現實的となつた。ヘーゲルに於ては之に反して合理的なるものは現實的であり、現實的なるものは合理的であつた。故にすべての間に内面的聯絡が生じ、シェリングに於て截ち切られたる二つの世界がイデーの運動又は發展によつて繋かれたのである。同時にかゝる運動は *dialektisch* なるものとして、一の立場の窮する處、自ら他の立場が現れ、更に兩者の統一が生じ、かくしてシェリングが等しく現象界のうちに投じたものゝ間に内面的秩序が構成されることが出来、シェリングが一度は無限界と對立するものとして、更に無限に於ける分裂によつて現はれるものとして、二重の意味をもたせてのみ考へ得た有限界の無限界に對する關係も無限より有限を出すロゴスの發展のうちに一貫せるものとなつたのである。ヘーゲルがシェリングに對して、*In Beziehung auf Spinozismus, ist zu bemerken, dass der Geist im Urtheile, wodurch er sich als Ich, als freie Subjektivität gegen die Bestimmtheit konstituiert, aus der Substanz, und die Philosophie, indem ihr dies Urtheil absolute Bestimmung des Geistes ist, aus dem Spinozismus heraustritt.* (Ency. S. 415 Anm.) といふのは之を意味する。吾々はシェリングが判断を説き得ず、説けば必ず自己の立場を破る事をこのヘーゲルの言葉より既に知り得る。嘗てアリストテレスはプラ

ト一のイデア界に對し、其經驗界と關係するを得ずして、唯經驗を二重にするに終つたと考へ、イデーと其模倣たる個物との間に更に第三のイデーを想定し、斯して無限に至らねばならぬといつて難じた。ヘーゲルがシェリングに對して同一と非同一定の同一を考へねばならぬといふのも之に平行する者であらう。ヘーゲル自身も、自己のうちより内容を生産しゆく思惟のエンテレヒーによつて、アリストテレスは本體としてのプラトリーのイデアを超越したといつてゐる。(Ency. §. 552 Anm.) 又シェリングが有限も如何に無限なる時間を涉つて在るも其本性に従つて一瞬たりとも絶對者のうちにある事の無限なるに若かぬ、といふ言葉を見れば吾々は經驗が二重にされたと考へざるを得ない。シェリングの絶對哲學はデガルト風の二元論より轉化したる一種の豫定調和の上に立つ二世界主義たる事を出でなかつたと思ふ。併し豫定調和に於てモナドの統一は破れる。シェリングはライブニッツの逆に絶對者以外のものを現象界に屬するものとしたのであるが、矢張同様の運命に陥らねばならぬ。故にベルグソンが平行論、豫定調和はその假面をとれば單に事實の敘述にすぎぬ、またすぎざるを得ぬといふ非難は (Matière et Mémoire p. 247) シェリングの哲學にも當り得る非難であると思ふ。ヘーゲルの現實の非現實的見方にすぎぬと

いふ批評もかゝる意味である。ベルグソンによれば普通の二元論の誤謬は空間的即並立の見方より出發するにある、一方には空間中に物質及其の變化を置き他方に意識を考へ、兩者の關係そのものを忽がせにする處にあるのである。その困難は二者の間の區別より生ずるのではなくして、如何にして一方より他方に接續するかを理解することの不可能にある。(op. cit. 247—9) 吾々がシェリングがフイヒテの自我に強制を加へたと考へたのも、外よりの見方、並列の見方に對してである。シェリングは二つの世界を分つと同時にその二つを *reelle Tätigkeit*, *ideelle Tätigkeit* として一の自覺の働きのうちに收める純我の生命を奪つた。生ける花は絶對者のカンバスの上に刺繡された花となつて仕舞つたのである。

ヘーゲルと雖もかゝる批難を免れぬと思ふ。ヘーゲルにとつては *Ich=Ich* は *Ich soll Ich gleich sein* といふことにすぎなかつた。自我は判斷の世界にのみ置かれて事行は *das Logische* の發展をめぐる圈内に籠められて、事行といふ事物となつたかの觀がある。シェリングより出でたるヘーゲルもイデーの論理的發展を説くもイデーが直ちに働く世界の意味を深く考へなかつたと思ふ。そのイデーは眞の意味で動物ではなく、其處に取扱はれたものは矢張 *l'action accomplie* であつて、*l'accom-*

plaisant ではなかつた。

シエリングがフィヒテより離れたのはその知識學が無内容にして具體的知識の體系を與へぬ故單に主觀的と考へられたのにある。然らば吾々はフィヒテの事行の如きものに内容を與へ、具體的内容自身の生ける發展の世界を考へ得ぬであらうか。これによつて事行を單に主觀的と考へらるゝことより拯ふと共にその動的意味を保ち得ると思ふ。かゝる世界を求めて吾々はベルグソンの純粹持續の世界に入る。勿論論理主義の立場からいへばかくの如きは心理主義として排されねばならず、又排さるゝのも當然であらうが、超越的立場も心理主義を眞に止揚したものでなければならぬ。唯蟬の殻を抜けるが如く之を脱ぎ捨てたのではなく寧ろ變態の如くその内面より出でゝ之を變ずるものでなければならぬ。生けるものより生けるものへの變態でなければならぬ。シエリングの立場はベルグソンの如き見方を有せず、またこれを否定することも出来ぬ。

シエリングは「超越的觀念論の體系の初めに於て、知識そのものに於ては、即ち私が知るといふ限りに於ては主客は合一して、そのいづれにも *Priorität* を定めることは出来ぬ、唯純主觀的なる知的直觀の立場に立つことによつて他の如何なる方法によ

つても反省せられぬこの世界が反省せられるのであるといつてゐる。しかし同時にそれは全く客觀的内容を失ふ。従つてかゝる原初的な反省の根柢に於て、具體的内容を得んとすれば絶對的立場に至らねばならぬ。シェリングは「講演」に於て反省の世界に屬する形式のうちに根本知を表現せんとするのが思辨と反省との關係であり、かくして現はれるがドイマンクテイークである（alles als eins darzustellen und in Form, die ursprünglich dem Reflex angehört, dennoch das Urwissen auszudrücken, Es ist dieses Verhältnis der Spekulation zur Reflexion, worauf alle Dialektik beruht (Vorl. VI.) からいつあるが、その靜的な絶對的立場に於て最も純絶對的なものは Sein である。Dialektik は Sein より初まらねばならぬ。シェリングの絶對的觀念論が最後に到達したのはヘーゲルの論理主義であるのは當然であると思はれる。併し同時に知的直觀の動的意味は拭はれて仕舞はねばならぬ。然るに Seinこそ反つて事行の如きものゝ一面であるとも考へることが出来るのである。それは兎に角然らば吾々は必然的にヘーゲルに至らねばならぬのであらうか。シェリングの所謂知ることそのものゝ世界は反省することの出来ぬ純なる Produzierenの世界である、併しかゝる直接なる世界は全く不可知の世界であらうか。シェリング、ヘーゲルが絶對的知識を

考へた如く思辨は思辨自身を思辨する事は出来やう、併し之は價值が價值自身を保持し、意味が意味自身を意味する如く超越的客觀的知識が知識自身に歸つたことを意味する。吾々はかゝる知識のうちにあるが、かゝる知識は直ちに我々のうちには入らぬ、我々を超越せるものである。少く共直ちに我といふ如きものと結合して居るものではない。我を含む他面に、我を消すことなしに、我の内面に見出さるゝものではない。然らばかゝる主客の眞に一なる世界は反省の方向を行き盡して反省が自身を見失つた絶對的知識に於てのみ考へ得るのであるか。それ以前に於て純なる Produzieren の世界に入ることば不可能であらうか。併しベルグソンが全く反省を捨てゝ純なる直觀によつて意識の内面的状態を把握するといふのはかゝる意味ではないのであらうか。爲されたる事實の外に爲されつゝある事實の特色は抹し去ることの出来ぬものである。シェリングが私を知るといふ限り (im Wissen selbst indem ich weiss) 主客が具體的結合のうちにあると考へた時、既にかゝる世界に觸れてゐたのである。唯シェリングはかゝる世界を最も直接なるものと考へ乍ら、他方常識の世界を直接なる所興として、そのうちに含まるゝ二つの Grundvorurteile から即ち吾々より獨立なる外物が存在するのみならず、吾々の表象もその不變なる物を表現

するといふ確信及び表象は自由に吾々のうちに生起し得るといふ確信から、二つの方向に發展を考へたのである。併し常識の世界は悟性使用の世界である。その根本的先入主も悟性を適じて現はるゝ純粹なる理性使用にすぎぬ。故に後にシエリングは悟性に從屬せる理性として之を排し眞の理性の立場に至らねばならぬといつた。併しこれも悟性を適じて悟性の上に出でた立場であり、その絶對的知識も反省の極限に現はるゝものである。一步翻つて常識の世界、悟性の世界を出づれば *indem ich weiss* といふ如きフイヒテの立場に歸る。ヘルダソンの世界もこれである。其處に於て理知が斥けられるのもこの故である。

III

吾々は先にシエリングの *Einheit des Gegen-satzes* といふ如き考へでは理念界と現實界との關係を説明する事が出来ぬ、主知主義は畢竟 *Gegen-satz* を單に濁りなき *Einheit* を産む爲にのみ役立つ者であると見て、常に統一のみに立つ故、最高の統一に達すればすべてを現象界と考へざるを得なくなる、これを即自に見れば絶對者のうちにあるといふも單に經驗を二重にするにすぎず、皆夕闇のなかの牛の如き者となるを免

れぬといふことを見た。これは當然のことである。シェリングによれば、純なる *Existenz* は實在せぬ。従つて最高の對立も實在せぬものである。ゆえに最高の對立の超越によつてのみ可能なる最高の統一、全く他との關係を含まず純粹に超越的なる濁りなき統一も實在することは出来ない。もしこれを實在とすれば、これのみが唯一の實在であつて、他は皆現象界に屬するものとならねばならぬ。シェリングはこれに對して、*an sich* に見れば絶對的であるといひ、*das Reelle* と *das Ideelle* との對立は單に *Ideell* なるものにすぎぬといひ得る以上を出でることは出来ない。

然らばこの所謂統一といひ、對立といふものは如何なるものか。對立は普通に二つの物の對立といふ場合のごとく互ひに外的なるものが對立せるのではあり得ない。實際如何なる意味に於てもかゝる對立はあり得ぬ。對立といふには必ず對立するものを統一するものがなければならぬ。對立もこの基礎に於て可能である。併しこれのみでは尙對立は生じない。統一は對立するものに外より加はり來るものであつてはならない。必ず對立するものゝ内に含まれ之に共通なる一般者でなければならぬ。相撲の土俵の如きものは統一ではない。のみならず更に對立するものが——フイヒテの言葉を藉りれば——*Tun* と *Leiden* 能動と所動との關係にな

ければならぬ。従つて一般者はかゝるものを統一するものであり、單に甲乙二人の人に共通なる力士といふ如き概念があつてはならぬ。これは抽象された概念にすぎぬ。甲と乙とでは對立にならぬ。もしなるとすれば甲と甲ならざるものとして乙といふ場合、或はその反對の場合が考へられた時である。然らばかゝる A と non-A との一般者は何であるか。明に A である。併し A といへば既に non-A に對立する。シェリングの根本的弱點はこゝにあるのである。non-A に對立し、然もこれとこれに對立する自己とに一般的なるものは A ではなくして non-A でなければならぬ。フイヒテのいふ如く A sei ではなくして wenn A sei, so sei A でなければならぬ。眞の一般は働く一般である。抽象的概念と異つて働く概念である。即ち事行である。non-A も之に對する A もかゝる事行に支へられて存立し得る。シェリングが純なる Differenz はないといひ、das Reelle も對立のうちにてのみ成立するといふのもこの意味である。Einheit は Einheit das Gegensatzes である。然も後者は前者に對し更に Gegensatz となり兩者の Einheit が求められる。これも Einheit das Gegensatzes として更に高き Einheit を求める、かくして無限に自己の内面に進みゆく自己表現的活動が自覺である。然らばシェリングが靜的絶對者を考へねばならなかつたのは何故であつ

たか。彼は一方に於てフイヒテの無限に自己のうちに歸りゆく活動に不満を感じ、他方に於て知識學は具體的内容の體系に入り得ずと考へた。フイヒテの事は主—客觀化 *Subjekt-Objektivierung* であつた。シェリングはこの客觀にも主客合一の意義を與へることによつて主觀は *subjektives Subjekt-Objekt* となり客觀は *objektives Subjekt-Objekt* となり、その統一として靜的なる絶對者が考へられたのである。かくてフイヒテに於ては永遠に合理化さるべきものとして残つた非合理的なるものも、絶對者の立場に於て、そのまま合理的となつた。フイヒテに於ては所謂 *Nichts* ともいふべきものゝ根が絶えず残つてゐたが、シェリングは意識我を超越し、絶對的立場に飛躍することによつてこれを絶つたのである。併しこれと共に前述の如き矛盾が起つた。ヘーゲルはこの同一と更に對立する非同—との同一を考へたが同時にかくしてシェリングの動機を無視した。何者ヘーゲルはシェリングの絶對的立場に於て、後者が純粹なる *Differenz* を殺しこれを含むものを一切現象界に追つた飛躍的立場を再び現象界に接續するのである。これは當然であつたかも知れぬが、これによつて或る物が失はれたことも争へぬ。かくして無限なる過程が再び現れ、同時に閉合的體系が建設された。シェリングの絶對者を譏つて現實的なるものゝうちより

も絶對者が現はれねばならぬと考へたヘーゲルの絶對者は、現實界に働くと共に現實界と關係に入ることによつて濁らされた。かくして生れたものが、その閉合的論理主義である。辨證論がその哲學の性質を最もよく語るものである。氏自身の言葉をかれば *die Affirmation als Negation der Negation* がその *Leinmotiv* であつた。併し否定の否定は直ちに眞の肯定とはならぬ。少く其處に方向の相違がある。一般より特殊にゆく辨證的發展は一般を含む特殊より特殊への振動と方向を異にする。而してこの相違こそ立場の相違を意味するものに外ならぬ。フイヒテは勿論全く肯定の立場であつた。併し尙絶對的ではなかつた。シェリングの絶對者はそのヘーゲルに非難された點に於て反つて肯定の立場の可能を残して居たのであるが、それが靜的に考へられた以上、ヘーゲルへの移りゆきは當然であつた。併し一方に於てシェリングが後に主意的立場に發展し得たのも正にこの非難された考へ方によつて可能であつたと思はれる。——兎に角フイヒテとヘーゲルとの中間にあるシェリングの立場は吾々に最も興味を興へるのである。然らば吾々はシェリングの絶對者の意味を變ずることによつてヘーゲルと反對の方向にフイヒテの如き立場に歸り得ぬであらうか。Einhelt は Linheit と Gegensatz の更に詳しくいへば Einheit と

Einheit des Gegensatzes 々の Einheit である。この三つの Einheit を貫いて無限に進むためには自覺的發展を考へねばならぬ。併しかくしては Gegensatz の根は恒に残る。然らば自覺的發展に絶對的立場を考へることは矛盾であらうか。シェリングの絶對者は尙否定の否定の所産であつた。すべての對立を捨てることによつて得られたものである。對立の世界に働くのは肯定の立場である。シェリングは之に對立してこれを迎へ見ることによつて超越したのであるが、同時にこの肯定の立場を殺した。吾々は否定の立場を更に翻つて、肯定の立場に立つことによつて、現象とせられた世界に内面的に聯結して、之に再び生命を興へ、同時に絶對的立場を維持することが出来ると思ふのである。シェリングの純なる Differenz はないとは不可知的なる物自體の如きものがないといふ意味に外ならぬ。das Reale も das Ideelle との對立のうちに於てのみ成立つ。Gegensatz は必ず Einheit のうちに於て對立する。統一を豫想せざる對立は考へ得られぬ。純なる直觀に於ては唯物あるのみであらう。併し實はこの物も直觀を離れてはあり得ぬ。こは反つて、自我の全作用がこの一つの直觀の作用のうちに集中されて、自己のうちの分裂を絶し自己自身を忘れ (vergessen) たことを意味する。寧ろこの忘却の處に物が現れる、忘却が物なのである。故に物の

みあると考へらるゝ場合と雖も物が物自身に歸るといふことは出来ぬ。忘却自身は忘却を知ることが出来ぬ。然るに直観は自己のうちに歸り得る。吾々は作用を意識することが出来る。これは如何にして可能であるか。作用は吾々の作用である。誰の作用でもない作用はない。然らば吾々は作用を外より知ることが出来る。吾々の作用を知る作用も吾の作用でなければならぬ。併し知らるゝ作用が自らを知ることは出来ぬ、見ることが出来ることは出来ぬ。然らば作用を知る作用は高次の作用でなければならぬ。物のうちに忘れ去られた作用が反省された時、自己の作用として現れるのは、作用の作用が働いてゐる故である。作用の意識とは、作用と作用の作用との一なる働きより、作用が一步自己に歸つて、大なる作用に觸れるときに生ずるのである。

シェリングは知ることによつて知ることを知り、更に知ることを知ることを知ること、かくして無限に至る知識が第一の知識のうちに含まれてゐて、無限の復歸は止場されるといふ。これは最も明にシェリングの立場を示し、吾々の立場との相違をも明にするものと思ふ。絶對者の影を映じたる第一の知識は背後に無限なる知識の可能を含み、自身絶對的である。併し更にこの無限に發展する知識は皆第一の知識の

模倣である。絶對的知識にとつてかゝる相對的知識はなきに等しい。恰もすべての現象界が絶對者に對してなきに等しいと一般である。現象界は絶對者の明澄に對して無關係である。然らばかゝる無限の發展は惡しき無限である。抑、如何にして第一の知識が第二、第三と無限の知識を産むのであるか。其説明は現象界の説明と共に不可能であらう。併し、 $A=A$ なる如く、知ることは知る事を知ることの根柢に於て可能であり、更にこは知ることを知ることを知るといふ反省の反省の立場に現はれ來るものに基礎附けられる。これが第一のものである。勿論これも「知る」といひ得るかも知れぬ。併しこは最早知るを知り更に無限に行くを許さざる「知る」である。知るものなき「知る」である。然もこれを知らんとすれば無限の發展が産れねばならぬ。併しこれは最早現象界ではない。何者「知る」を知るのも「知る」の働きである。「知る」は働く「知る」である。かゝる無限の復歸が止場されると同時にされざる動靜一如の知識はシェリングの知識ではない。この點に於てシェリングの立場を翻して見たものたることも明かである。シェリングには *das Dritte* が吾々には *das Erste* なのである。かゝる知られざる「知る」は單なる知識ではない。これを知識とすればこそ無限に相對的立場を下らねばならぬのである。こゝに主知主義と主

意主義との相違も明かである。主知主義は *das Dritte* を *das Erste* とするものである。吾々はシェリングのイデーのイデーを動的に解することによつて現象界に至り得る。シェリングは有限なる物も概念によつて無限なるのみならず、イデーによつて永遠であるといつた。すべては對象即作用としての純なる作用の分化發展である。働くものと働かるゝものとの分裂も後より反省の立場に現れ来るものにすぎない。シェリングの絶對者の如きものはかゝる反省的方向に於て知的自我の極根として現はるゝものである。吾々はかゝる極根の彼方に出づる事によつて行爲的主觀に達し眞に限定的なる方向をとり得る。然も同時にシェリングが絶對的立場に於て感性直觀の對象界に純なる存在としての永遠性を許し得た如く、感覺界にも思惟の合理化より獨立せる實在性を認め得る。シェリングが自然界と精神界とを兩者の含むイデーを通じて絶對者に於て統一した如く、感覺の世界と思惟の世界とを高次の作用に於ける作用と作用との結合によつて統一し得る。而してシェリングが一般的に直觀の對象界として現はるゝ經驗界の意味を *das Reale* として立てたるものを次に單に *Ideell* なる限定によるものとして考へることに於て靜的に感性の意義に所を與へるに止まるに反し、吾々は純なる作用として感覺にもそれ自身

の對象界を考へて主知的なるシェリングの缺を補ふことが出来る。シェリングに於ては感覺的主觀といふ如きものは考へることが出来ぬであらう。併し繪畫音樂の創作に働く自我は明にかゝる自我である。藝術はシェリングの立場よりも恐らく神聖なる狂氣としてのみ解せらるゝであらう。單に藝術の世界に限らずすべての感覺はかゝる感覺的主觀ともいふべき純なる作用によつて成立つのである。純なる作用は無限なる對象の生産である。對象を外にもつ作用は反省の面に於けるその射影にすぎぬ。シューマンは歌謠を作曲しつゝある間絶えずシューベルトの靈が耳元に歌ふのを聞く如く感じたといふが、歌が歌自身を作りゆくのが純なる聽覺作用であり、無限なる旋律の生産の根元として働くものが聽覺である。音は皆旋律である。更にかゝる純なる作用に働くものは、作用の作用である。純感覺的なる作用が藝術の如き個性を表現する人格的内容を創造し得るのもこれによるのである。四つ辻に分れた風の一つとし感覺作用も一の自覺的發展である。感覺の純化従つて藝術の優劣といふ如きこともこれより生ずるのである。もし作用の作用といふ如き働きがなければ、經驗的なる自覺といふこともなく、従つて熟達といふことも考へられぬであらう。單に靜的なる映像といふ如き考へ方を以てしては、かゝる

現實界の事實は説明され得ぬのである。

併しシェリングは絶對者を何故に靜的に考へねばならぬか。「講演」に於ていふ如く現實が可能に先立つ *das Reale* に同一者が自己を表現したときに空間が現れ、可能が現實に先立つ *das Ideale* に表現したとき時間が現れると考へらるゝとき無限の可能即現實なる同一者は動的靜靜的動でなければならぬ。「ブルノー」に於てはシェリングは、絶對者は最も深き靜止の如き靜なる活動、最高の活動の如く動的なる靜止であるといつてゐるが、同時に時間は初めなく終りなき延長として同一者を表はし、空間は *das Reale* に於てあるが認識と存在との最高統一として最高の存在たると共に最高の直觀として最高の *Idealität* を含む働きとは存在と並んで相對的世界に屬する形式があるといつてゐる。併しかく空間を強調したのはフイヒテに對する反對も大なる動機であらう、然らば純粹なる時間を初めなく終りなき直線と解するとしても抑、時間と空間との關係は如何に考ふべきか。反省の圖式としての時間は兎に角純なる活動としての生ける時間が無限なる延長として表現されるのは不適當に思はれる。直線といふ限定が單なる空間と異なる事を努めて考へるのでなければ、ともすれば一次元として空間のうちに吸ひ込まれ易い。ベルグソンの所謂時

間の空間化が生じ易い。併しかゝる直線は寧ろシェライエルマッヘルが *Der Punkt, da eine Linie durchschneidet, ist nicht ein Teil von ihr: er bezieht sich auf das Unendliche ebenso eigentlich und unmittelbar als auf sie, und überall in ihr kannst du einen solchen Punkt setzen* (Monologen I.) といふ如き點の連続でなければならぬ。ベルグソンの所謂同時存在の世界を破る尖端の如きものゝ連続である。故にこの兩者の關係を三次元の世界に移してベルグソンの如き圖式に還元することが出来る。然らば可能が直ちに現實なる如き絶對者自身は如何にして表現するか。現實を圓錐形の尖端とし、それが背後に負ふ無限なる可能をその無限に廣き底と考へれば現實が可能に先立つといふ場合は尖端より底を見るのであるが、この際は尖端は一の點として無限の平面に没して仕舞ふであらう。之に反して可能が現實に先立つ場合は底より尖端を見るのであつて唯一の點の現實化のみを考へることが出来る。故に可能即現實にして無限有限を即自に含む絶對者を時間と空間の結合として表現する場合はすべての可能が現實化されたものと考へて無限の平面に無限なる點を植え込むべきであるか。併しそれでは平面のみ考へると異なる處はない。こは時間を空間に没却するものである。一次元としての延長せる直線では尙更ない。然らば如何に考ふべきで

あるか、シェリングが永遠者の永遠に静けき姿の模像であるといつた如き空間は自己を直線に限定することは出来ぬ。シュライエルマツヘルの考へる如き點の連続としての直線は空間と次元を異にする。のみならず純なる活動は平面界の點では表すことは出来ない。宇宙の化成の切斷面に現はるゝ尖端の點は活動の器關であつて活動自身ではない。活動は點を離れぬであらうが點が活動するのではない。故に絕對者は面でもなく點でもない。その合したものでもない。時間と空間に *indifferant* なるものは力である。兩者はこれを豫想して成立つ。 *das Reale* に於て力として現れるものが *das Ideale* に於ては作用の意識又は *mobilité* の意識として現はれるのであらう。

併し最後に疑問がある。純なる作用の如きものも考へられるかも知れぬが、吾々の反省的立場に於ては作用と對象とは分裂する。然らば純なる作用は單にシェリングの所謂 *an sich* であるか、然らば反省の世界は現象にすぎぬ。もしこの背後に動く働きを考へれば、反省的立場といふ如きものは如何にして可能であるか。 *das Reale* も自我の構成によると考へねばならぬであらうが、他方吾々は心外實在といふ如き意識を有してゐる。かゝる經驗的又は反省的自我とは何であるか。これを追究して吾々はシェリングの自由思想にまで至り得るであらう。(未完)